

おばあさんと黒ねこ

小川未明

青空文庫

いまでは、いい薬くすりがたくさんにありますけれど、まだ世間せけんが開ひらけなかつた、昔むかしは、家伝薬かでんぐすりなどを用もちいて病氣びょうきをなおしたものであります。

この話はなしも、その時分じぶんのことで、雪ゆきの降ふる北きたの国くににあつたことでした。

おじいさんは、働はたらいて、たくさんのお金かねをおばあさんに残のこして、先さきへこの世よの中なかから去さつてしまつた。後あとに残のこされたおばあさんは、独ひとりさびしく暮くらしてゆかなければなりませんでした。

おじいさんとおばあさんの間あいだには、ただ一人ひとりの子供こどももなかつたのです。おばあさんは、おじいさんの残のこしていつてくれた、たく

さんのお金かねがありましたから、なに不自由ふじゆうなく暮くらしていくことができませんでした。

しかし、おばあさんもまたしあわせな人ひとではありませんでした。ふと目めを患わずらって、それがだんだん悪わるくなって、ついに両方りょうほうの目めとも見えなくなってしまうのです。

おばあさんの家うちに、一匹びきの黒ねこが飼かわれていました。このねこは、おばあさんが病びよう気きにならない時じ分ぶんに、ある日ひのこと、犬いぬに追おわれて裏うらの高たかいすぎの木きに逃にげてきて上あがったのでした。

「あのねこを殺ころしてしまえ。」と、村むらの子供こどもたちは、犬いぬにけしを掛けて木きの下したにやってきました。そしてねこを目めがけて石いしを投なげつけたり、棒ぼうを持もってきて突き落おとそうとしたりしたのでありま

した。

黒ねくろこは、いつししょうけんめいに、すぎの木の枝えだにしがみついでいました。小石こいしは、四方ほうから飛とんできて、体からだのまわりをうなつて飛とんでゆきました。それが一つ当あたろうものなら、いくらねこは、しつかりしがみついても、目めがくらんで落おちずにいられませんでした。ねこはそれを思おもうと、ぶるぶる震ふるえていたのです。「もつと長ながいさおを持もってこいやい。」と、子供こどもたちは叫さけんでいました。

このとき、おばあさんは、家いえの内うちで仕し事ごとをしていましたが、あまり犬いぬが吠ほえますので、何なに事ごとが起おこつたのであろうと裏うらへ出でてみました。

すると村むらの子供こどもらがおおぜい寄り集あつまってきて、すぎの木きに逃にげて上あがった、ねこを突き落おとして、犬いぬに殺ころさせようとしていたのであります。おばあさんは、悪いわることをする子供こどもらだと思おもいました。

「ああ、みんないい子こだから、そんなことをするものでない。」
と、おばあさんはいいました。

子供こどもらは、おばあさんのいうことなどを耳みみにいれません。

「あのねこは、鶏にわとりのひなを取とった悪いわるねこだもの、殺ころしたつてか
まいはしない。」

「あのねこは、宿やどなしなんだから、だれもしかりやしないんだ。」
子供こどもたちは、かつてな理屈りくつをつけて、さおにさおを継つぎ足たして、

どうかして高い木の枝までとどくようにしたいと苦心していました。

犬は、上を仰いで、おおぜいの子供たちの加勢があるので、ますます猛り吠えていたのです。

おばあさんはこの有り様を見ると、木の上にしがみついているねこがかわいそうでなりませんでした。

「そのねこは、家がないなら私におくれ、飼ってやりましょう。そのかわり、そこにいるみんなにお錢をあげるから……。」と、おばあさんはいいました。

子供たちは、お錢をくれるといわれたので、たちまちおとなしくなっていました。おばあさんはみんなにお錢を分けてやり

ました。子供たちは、犬をつれてどこへとなく去ってしまったのです。ねこは、ようやくにして危うい命をおばあさんに助けられました。おばあさんは、ねこの好きそうな魚をさらにいれて裏口に置いてやりました。日暮れ方になると、ねこは、まったくだれもあたりにいないのを見すまして木から降りてきました。こうして、この黒ねこは、その日からおばあさんの家に養われたのでした。

ある日、おばあさんは、ねこに向かつて、

「私は、このように目が見えなくなってしまうた。おまえは、これから、私の力になつてくれなければいけぬ。」といわれました。この村の人たちは、おばあさんが金持ちだということを知つて

いました。そこで、村は小さくて、いたって戸数は少なかつたけれど、おばあさんの家を除いては、いずれも貧乏でありました。中には、困ると、おばあさんのところへお金を借りにやつてきました。おばあさんは、いい人でありましたから、いやだとはいえませんでした。それに、自分は一人でいるし、また村の人たちの世話にならないともかぎらないからと思つて、お金を貸してやりました。

「おばあさんから借りたのだから、早く持つていつて返さなければならぬ。」といつて、正直な人は、金ができると返しにゆきました。しかし、よくない人間もあつて、

「どうせおばあさんは盲人だ。それに金を持つていゝのだから、

すぐに返すことはない。」

「いって、約束の日がきても返さないものもありました。」

黒いねこは、よく人間を見分けたのでした。

「おばあさん、困っていますから、お金を貸してください。」と、村の人がいつてきても、ほんとうに困っていて、また約束を違えずに返す人なら、ねこは、おばあさんのひざの上に乗って、のどをゴロゴロ鳴らしていましたけれど、きた人がおばあさんをだまして、金を取る考えであると、ねこは、その人の腹の中を見破りました。

「おばあさん、この人に、金を貸してやるのは、およしなさい。」
 といわぬばかりにみえました。

おばあさんは、ねこがそういつて鳴いたときは、金を貸してやるのを見合わせました。いつしかおばあさんの家の黒ねこは、人間んげんよりりこうだという評判ひょうばんがたちました。なかにも正直しょうじ者きものの人々ひとびとは、黒ねこをほめましたけれど、腹はらのよくない、おばあさんをだまそうと思おもっているようなものは、黒ねこを悪わるくいつて、あんなのを生いかしておいては、末すえになつて、怖おそろしいなどといふらしたのであります。

また、あるときは、黒ねこのことを、

「あのねこは化ばけますよ。ひとりで障しょうじ子あを開あけたり、閉しめたりします。また、おばあさんが、目めが見みえないと思おもつて、手てぬぐいをかぶつて、踊おどつたりするのです。」といつて、どうかして、黒くろ

ねこを退治たいじしてしまおうとしました。しかし、なかには、黒ねこをかばうものもあり、また黒ねこくろがりこうで、容易よういに、その人ひとたちの手てにかからなかったのです。

おばあさんには、べつに身内みうちのものというほどのものもなかった。病気びょうきになると村むらの人ひとたちが、しんせつに世話せわをしてやりました。おばあさんはいいい年としでもありましたから、病気びょうきにかかるとほどなくこの世よから去さってしまいました。

村むらの人ひとたちは、おばあさんに世話せわになったものが多おほかったから、その人ひとたちの手てで葬式そうしきはすまされたのです。

「さあ、葬式そうしきもすんだが、おばあさんは、お金かねをどうしたろう？」と、いったものがありました。

「なるほど、おばあさんは金持ちだった。きつとどこかへ隠してあるに違いない。」と、あるものはいいました。

集まった人たちは、家の内をくまなく探しはじめたのです。けれど、ほんのわずかばかりの金が財布の中にあつたほかには、まとまった金というものが見当たらなかつた。

「お金のないはずがない。きつと天井張りの上だろう……。それでなければ、畳の下にちがいない。」と、あるものはいいました。

天井張りの上も、畳の下も探しましたが、やはり金は見いだされなかつたのでした。

「おばあさんは、もう金をもっていなかつたのじゃないか。そし

て金かねがなくなると、ちようど自分じぶんの命いのちもなくなつてしまつたのだらう……。」「と、いったものもありました。

みんなが、こうして大騒おおさわぎをしているのを、黒ねこはあさましそうに黙だまつて見みていました。

「おお、この黒ねこが知しっているはずだ。さあ、どこにお金かねがしまつてあるか、いえ！ いわなけりや、だれも、飯めしをやらないうぜ。」と、人々ひとびとは、黒ねこに向むかつていいました。

黒ねこは、とうとうその日ひから、主人しゅじんを失うしないました。そして、ひとりさびしい暗くらい空あき家やにすんでいましたが、だれも、飯めしをくれるものもなかつたから、夜よるになると外そとへ出でて、あたりのごみためをあさつていたのです。

そのうちに、寒い、怖ろしい冬がやってきました。ごみための
 上まで雪が深く積もってしまいました。哀れな黒ねこは、ひもじ
 い腹を満たすことができないので、悲しい、うらめしい声をあげ
 て深夜に雪の上をうろついたのでした。

家の中では、人々が目をさまして、悲しそうに鳴くねこの声
 に耳を傾けていました。

「かわいそうに、おばあさんがなくなられてから、だれも、食べ
 物をやるものがないから、ああして鳴きながら、探して歩いてい
 るのだ……。―と、いつていました。

それは、吹雪のした、寒い、寒い晩のことでした。黒ねこは圃
 の中で凍えて死んでいました。村の人は、それを見つけたけれど、

気味悪きみわるがつて、その死骸しがいに手をつけるものはなかつたのです。

「もう一度、はげしい吹雪ふぶきがすれば、黒ねこは隠かくれてしまうだろう……。」

そう思おもつて、人々ひとびとは、雪ゆきの上うえにある黒ねこの屍しかばねを見みていました。しかし、一度、その黒い動物どうぶつの体からだは、吹雪ふぶきのために隠かくれたけれど、天気てんきになると、また黒く、雪ゆきの上うえに現あらわれたのでした。

そのとき、どこからか、たくさんのからすが集あつまつてきて、圍はたけの中なかにおり、黒ねこの死骸しがいをつつきました。村むらの人々ひとびとは、雪ゆきを投なげたりしてからすを逐おつたけれど、二、三日にちは、そのあたりを、ガアガアと鳴ないて去さりませんでした。雪ゆきが積つもつて、山やまにも、里さとにも、食たべ物ものがなくなつたからであります。彼かれらは、

黒ねこの屍を食いつくすとまた、どこへともなく、飛んでいってしましました。

村人がそのことを忘れてしまった、雪の消えたころです。ふたたびどこからともなくからすが集まってきて、おばあさんの家の裏手の、いつか黒ねこが犬に追われて、逃げてきて上がった、高いすぎの木の枝に巣を造りはじめたのでした。

山の方から、また丘を越えて、海の方から枯れ枝や、海草や、毛のようなものをくわえてきて、からすは巣を造りました。

「おばあさんの家の裏へ、からすが巣を造りましたね。」

「あの家は、黒ねことか、からすとか、いろいろなものがくる、みような家ですこと。」

むら ひと
村の人たちは、こんな話もしたのでした。

ある日のこと、みんなが、わいわいいつて空をながめていました。

ばんがた そら
晩方の空にからすがてんでに、ぴかぴか光るものをくわえて、
すぎの木の頂を飛びまわっていたのであります。

「あれは、なんででしょうか？」

むら ひと
村の人たちは、木の下にやってきました。そして、中には、わ
ざわざ木の上へ登ってゆくものもありました。からすは、巢の中
へ、光るものをくわえてはいるのもあれば、また、これをくわえ
て山の方へ、丘を越して海の方へ、思い思いに飛び去ってしまう
ものもありました。

木の上へ登つていったものは、ようやくのことで、からすに頭をつつかれたり、目をねらわれたりするのを防いで、巢の中から光るものを一枚取り出してみたのでした。

「金の小判だ！」と、木の上から叫びました。

木の下に立っている人たちは、まさか金の小判をからすがくわえてくるはずがないといつて信じませんでした。そのうちに、木から降りてきたものが、それをみんなに見せると、ほんとうに、金の小判でありました。

村の人たちは、大急ぎをして、からすの持っている金の小判を奪おうとしました。しかし、からすは、それをくわえて、いずこへとなく、みんな散つてしまつて、村人の手にはいった小判

は、やっと二枚まいしかありませんでした。

「おばあさんは、金かねを持っていなされたはずだが、なくなられても金かねがどこにも見みつからなかったのはおかしいと思おもっていた。か
らすが、どこから見みつけ出して、くわえていったのだらう……
。」

「まだ、どこかに、隠かくしてあるかもしれない。」

彼かれらは、宝たから探さがしでもするように、おばあさんの家いえの周まわりを掘ほりはじめたのです。けれど、なにも見みい出すことができなかった。

この話はなしが、まったく、不思議ふしぎな話はなしとして伝つたわりました。その翌よ年のこと、村むらに悪わるい病びょう気が流りゅう行こうしました。ちょうど、そ

のとき、旅たびの薬くすり売りが村むらへはいつてきたので、村むらの人ひとは、その薬くすり売りから薬くすりをか買いました。

その薬くすりは、たいへんに病び気ょうきによくきいたのであります。薬くすり売りは、あちらへ呼よばれ、こちらへ呼よばれました。

「なにか、この村むらにたたっているのではありませんか？」と、薬くすり売りはいつた。

村むらの人ひとは、べつに、たたるものもないが、おばあさんが死しんだけれど、だれも、墓はかを建たててやるものがないということ告つげました。

薬くすり売りは、頭あたまを振ふりながら、

「それは、よくありません。村むらの人ひとのお世せ話わになつた、おばあさ

んの墓はかを建てたててあげないという法ほうはありません。」といいました。
 「薬屋くすりやさん、あなたのいわれるのは、もつともなことです。けれど、この村むらは、いつだって貧乏びんぼうです。そんなにお金かねがないのです。」と、村むらの人は答こたえました。

薬屋くすりやは、考かんがえていましたが、

「私わたしの持もっている薬くすりは、どれも家伝かでんの名薬めいやくです。この薬くすりの造つくり方かたを、この村むらの人ひとたちに教おしえてあげましょう。そのかわりに、か
 らすのくわえていたという二枚まいの金きんの小判こばんを私わたしにわたしください。私わたしは
 それを土産みやげにして故郷こきょうへ帰かえり、この不思議ふしぎな話はなしをいたします：
 …。」といいました。

村むらの人ひとたちは、集あつまって相談そうだんをしました。そして、二枚まいの小こ

判を薬売りにやりました。薬売りは疫病にきく薬の製造法と、下熱剤の造り方を村の人に伝授しました。

この旅人は、小判を携えて、いずこへか去つてしまいました。その後で村の人は、薬売りから教えられた薬を製造しました。この薬もたいへんによく病気にきいたのであります。

「こうなつたのも、おばあさんのしてくだされたことだ。」と、村の人はおばあさんに感謝しました。そして、黒ねことからすの絵を薬の袋に描くことにしました。

疫病にきく、毒下しの薬袋には黒ねこの絵を描き、下熱剤の薬袋にはからすの絵を描きました。村の人は、造つた薬をおぶつて、それから、山を越えて他国へ売りに出てゆき

ました。国々を春、夏、秋、冬と巡って、薬が尽きると、また自分の村へ帰ってきたのです。

北国のさびしい村は、こうしていつしか名高い薬の産地と知れ、富んだ町となりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

※表題は底本では、「おばあさんと黒《くろ》ねこ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

おばあさんと黒ねこ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>